

学生の聞き書き小噺



日々の暮らし・仕事

仕事をしながらね。子供を背負って草刈しに行ったりしよったのよ。子供を前に抱いて草をからって帰ってきよったよ。難儀はなんぼしたかわからんよ。

（昭和）三十年から市の山の植林をしよったの。スギやらヒノキら植えてお父さんと農業かたわら行くわけよ。長男と次男が生まれた時は山へ連れて行つたよ。

部落の人はみんな難儀するのよね。垂水まで買い物に行かなきゃならんしね。今の世じゃないからよ、牛を使つたつて草を切りに行つたりよ。薪をとりに行つたりしよつたよ。

- 実施日…2019年3月6日
- 語り手…大野原振興会 迫田 ナミさん（当時91歳）
- 聞き手…鹿児島大学 農学部3年黒瀬絵里奈・農学部2年石川佳芳・農学部2年池田希・農学部1年柴田雪花

学生の聞き書き小噺



聞き書き
語り手の話した（言葉をそのまま、まさに話しているかのような文章）としてまとめること”
大野のお年寄りほどのような人生を送ってきたのか。
これまで鹿児島大学学生サークル森人クラブや、演習林の実習として計2回の聞き書き活動を行いました。（平成23年と令和元年実施）
ここではほんの少しですがその活動でお聞きした貴重なお話をご紹介します。

垂桜の開拓

こつちの開拓が始まってほいで、（昭和二十一年）からみんなして、もう当時はほら食べるものも無くて、ほんとの山の木の実やらもおそろあたりにあるものは食べられるもんはなんでも食べて、もう栄養失調でみんなふらふらで、ここをひらいたんですよ。

それもほら、いまみたいにあのチェーンソーとか、いろんな機械があるじゃなし、のこで、ほら、大きな木を切つて倒してね、それを今度は焼いて、開拓をして、ずっと畑を開いて山鉾でうって、ほいで、芋なんかを植えててやつとやつと食べれるようになった。それから。それまではほんとにもじい思いをして、栄養失調でね、ふらふらで仕事をしよつたよ。

- 実施日…2011年4月
- 語り手…垂桜振興会 原田 勇三郎さん（当時79歳）
- 聞き手…鹿児島大学 農学部1年清水登子